

## 春遠からじ

先月号の向日葵だよりでは、衆院選の結果が判明する前に皆様にお送りせざるを得ない事情もあり、改めて衆院選の話題から始めます。解散から投開票まで16日という“超短期決戦”となった2月8日投開票の衆議院選挙は、**高市総理**が率いる自民党が結党以来最多の**316議席を獲得**する結果で幕を閉じました。自身の進退を賭け、高市総理を信任するかどうかを争点に設定するという文字通り「**高市劇場**」のような選挙戦でした。方や、急ごしらえの中道改革連合の「**1+1=2以上**」の目論見は、「**高い内閣支持率**」や「**巧みな選挙戦略**」などの前には功を奏しませんでした。(ハキハキした女性の高市さんか、野田佳彦氏と齊藤鉄夫氏のおじいちゃん2人を選ぶかという選挙になってしまった...と指摘する識者もありました。) 加えて、現行の選挙制度から生まれる違和感や課題も浮き彫りとなるこの度の選挙結果でもありました。



こんな中、イタリアの**ミラノ・コルティナ**で行われていた**冬季五輪**では、日本選手団は金メダル5個を含め、歴代最多となる**24個のメダル**を獲得。多くの日本人は、若き選手たちの活躍に大きな感動と勇気をもらえました。「平昌、北京に続いて**ベテランの選手**、**若い選手がひとつの目標に向けてかみ合い**、**若い選手を引っ張ってくれた...**」「日本選手団は、毎日のようにメダルを取っている姿を共有することで、いいように潤滑して回転した...」と関係者は振り返っていました。

さて直近の世界情勢では、**トランプ米政権**の**ベネズエラ攻撃**や**イランの最高指導者の斬首作戦**の実行には、国際秩序が変質しつつある現実を見せつけられた感がいたしました。(国連憲章は原則として他国への武力行使を禁じる。例外として攻撃を受けた国に自衛権の行使を認めるが、米国にそうした差し迫った事情があったとは言いがたい気がします。武力行使を容認する国連安全保障理事会の決議も得ていない状況です。)本来であれば日本は米国との同盟関係の発展に努めながらもこの流れを食い止め、**法の支配に基づく秩序**を立て直す努力をすべきであったと思います。トランプ大統領の「私に国際法は必要ない」と発言しているのは言語道断です。日米同盟は日本外交の基軸であり、米国との関係に一定の配慮が必要なのは確かですが、日本政府はこれまで法の支配の重要性を国際社会に訴えてきたはず...。大国が力に任せて好き勝手に振る舞うかつてのような世界に逆戻りしていいはずはありません。規模によらず国の主権を尊重し、各国との協力を深め、日本が掲げる「自由で開かれたインド太平洋」もこんな発想に基づいているものと理解します。

今回の「ハメネイ師殺害を目の当たりにした北朝鮮の金正恩(キム・ジョンウン)総書記は『核兵器保有』にさらに執着する」ことは明らかであり、当事国間の問題だけでなく国際情勢に与える影響は、計り知れないものと危惧するところです。